

安南幻想

すみくらまりこ



目次

ベトナム土産

海あがり

安南幻想

薰香の里

魔の白粉

天恵の薬

象の行列

孔雀献上

醉夢尽きず

ベトナム土産

大阪の詩友がベトナム旅行から戻つて、わたしに藍染付の一輪挿しを呉れた。淡い藍が南の木の葉を模していた。蓮茶の甘い香りが後を引いたとき、突然わたしのなかに急に「安南」という古の地名が懐かしい音感の響きをもつて立ち昇つてくるのを感じた。安南染付、それはいまでも盛んに作られ売られている。

四百年も前に近世の京都人が、行き船に日本の善き物を積み、戻り船に彼の地に集まる善き物を積み、交易をした地「安南」への憧れは、以来日々胸に深まり、まるで酩酊のように夢と現を行つたり来たりするのであつた。

海あがり

誰でも参加できるオークションに海あがりの安南染付が出品されていた。瑠璃釉一輪挿しの底には欠けがあり、貝殻がこびり付いている。その引揚品はどんな浪漫を語るのだろうか。暴風雨で難破した船は、分かつてているだけでも数艘は沖に沈み、四百年も海底に眠っている。柔らかい泥の覆われ長久の睡眠に耽っている。

さあ目を閉じて心の眼で見てみよう。

船倉の積荷は、木箱を縄で締められたまま朽ちることなく、見果てぬ夢のなかさ迷つてい る。そのひとつは鹿の皮。武士の鎧に陣羽織に、足袋に使われ、合戦の先頭を切つていたはずだ。歩きに歩いて難所の関を歩いたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。

次の箱は香料。上等品は將軍の頼まれ品。多くの御仏を無垢な香りで包んだはずだ。このま

ま海の藻屑となるわけにはいかない。次の箱は絹の布。京の職人が染や縫い取りを施し、戦国大名めざましい諸国の城に届き、城主や息子の凜々しい衣装に、正室や側室のあでやかな衣装になつたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。次の箱は蘇木だ。鮮やかな紅に染める植物。白い絹を憧れの紅色に染めたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。次の箱は鉛。これは白い顔料に、また白粉となり、絵師の筆に含まれ線となり面となり活き活きとした屏風になつたはずだ。美しい化粧に使われたはずだ。このまま海の藻屑となるわけにはいかない。柔らかな泥のなかで、彼らの夢は生活の具となり日々に愛用されること。こんな慎ましい夢が叶えられない。そして、船乗りの魂は・・・針路を決める紅毛の者、屈強な乗組員たち、祈りを続けるパードレ、羽織袴の商人、一つ船に合い和していれる五百名の者たち。船には帰るべき港がある。破片となつても母港へ戻らねばならない。引き揚げることは、やろうと思えば、可能だ。たかが六千円ばかりで、ネットで売られる沈

没船の品々。引き揚げ船長の名前入りだと、真偽を訝る人々に説得をしている。海あがりの品々は、人類が結んだ異国との信頼、海洋交易という歴史遺産の一部なのに。

安南幻想

十九世紀初め阮朝^{げん}が統一して越南と号して後も、再三他国の侵略を受け、北と南に分断され、苛まれても苛まれても誇り高く堪え抜き、ついに勝利し統一なった民族。いま繁栄の時来たる。

アゴタ・クリストフは小説「安南—愛の王国」のなかで十九世紀頃のヴェトナムをこのようにな著している。

「ジャライ族は、目に見えない精霊たちの住む世界を信じていた。神は、あらゆるものの中に住まっているのである。どんなものの中にも、それが無生物であっても、魂が宿つてい

る。これらのヴェトナム人たちは、賢く、穏やかだった。忍耐強く、彼らは、個々の靈が内に持つ宇宙を崇拜していた。雨が、そして月や風が、彼らに話しかける。』

安南ということばに、幻想を抱くのは、なにもわたしだけではない。時間が蕩けるように流れる平穏な彼の地は、まさしく安らかな南の国だ。

薰香の里

熱帯の濃密ないのちのやり取り、その競いがとめどなく深い森の中で収縮した。大ぶりの花は、香りのバリアを張り、隣のバリアに食込み、蝶を誘う。袋に蜜をしあげ、蟻を待つ植物、刺針を磨いて獲物を待つ葉、その長い潜み息。薰香の里はいのちの里だ。

外敵から身を守るため滲ませる自らの樹液に侵される木質の多難な一生はどうだ。時を経て硬化し、濁の川に身を落とした沈香は、熱を与え薰じられて初めて妙なる香りを放つの

「アヤベボダフ

だ。香積菩薩のみ言葉のように。そして安南にとれる極上の沈香は TAGARA（多伽羅）、
そう黒沈香は伽羅と名付けられた。

香積菩薩

彼の菩薩曰く、『我が土の如来は、文字の説無し。ただ衆香を以つて、諸の天人をして、律行（戒律）に入ることを得し
めたもう。菩薩は、各々香樹の下に坐し、この妙香を聞いて、すなわち一切徳藏三昧（一切の徳を蔵せる三昧）を獲
(う)。この三昧を得る者は、菩薩の有らゆる功徳を、皆悉く具足す。

魔の白粉

人は薄い皮膚をもつ。太陽の紫外線には弱い皮膚だ。人類の進化のなかで、日差しの強い
地帯に適応するため皮膚にはメラニンが生成蓄積され、紫外線を自然にブロックした。それ
は、まさに適応の勝利だ。日差しの弱い地帯には当然のこと色白の人々がいる。それを美し

いと感じたことが、人々を白粉への執着となつた。物心つくころから、女は白粉を顔に塗り、紅を差すことを覚える。

もし、それが毒であつたとしても、なお美しくなるうとする。それは魔が誘うからだ。いつたん化粧をすれば、素顔を客人（まろううど）には魅せられない。絢爛豪華な縫い取りの衣装に、高く結つた髪に、化粧をする、それは極めれば極めるほど白粉を重ねることとなる。もはやそこにいるのは鉛の鉱物毒を知らず美の虜となつたひとりの女であつた。

天恵の薬

了以の父は將軍に仕える御典医。天龍寺船に乗り、医学の漢籍や薬草を求めたという。そして最先端の医学を齎した。そんな話を聞き育った少年が、長じて安南へと船出したとしても不思議ではない。

古今東西に人が一番に求めるのは身体の健康、心の平和、長命である。そのために、薬草を求める、薬効あるとされる物を求めた。それは天恵の薬だ。動物が自らを癒すために、噛んだ樹皮や草だ。

熱帯は弱肉強食、強いものが勝つ、知恵のあるものが勝つ。そんな生命力が漲っている。木も花もこうだ。恋するとすら、生命の争いだ。

花木に

敵を痺らせる

毒あり

薄め薄めて

人用い薬とす

象の行列

天竺やシャムでは神聖とされる大きな動物、優しい目をした象が初めてきたのは関ヶ原の戦いの翌年、三万七千里離れたベトナムから千二百人乗りの船で時の將軍・家康公に献上されたという。虎、孔雀、象など熱帯の獰猛華麗な動物は島国日本にとつては珍しさ極まるものであり大層喜ばれる。異国への夢の種を少年にも植え付けてしまう。それは見た人の話や絵で世間にも広まっていく。襖絵に虎が描かれ勇猛で力の象徴ともなった。

そしてハ代將軍吉宗公の求めで二頭の象がまた唐船で日本へやってきた。船の倉に象の檻が作られ、はるばるとひと月かけて長崎港へやってきた。それぞれの象使いも一緒にやって

きた。一頭は病でなくなり、あと一頭が移動する。そうなると大変なこと、行列には見物人があまた集まってきたという。長崎から江戸への旅が、そこから続いていた。船に乗せて運べるところは運ぶものの、歩かねばならぬ道もある。献上ものゆえ、道は小石までとりのぞかれ、水桶が置かれ、橋は普請され一日四里歩いた。江戸までは永の道のりだ。京のみやこでしばらく過ごした。清淨華院には象小屋が建てられ天皇や皇族がご覧になつた。中御門天皇からいただいた位が「広南從四位白象」のつしのつしと都大路を象の行列は練り歩いた。伊藤若冲も錦の家から清淨華院まで写生に来たかもしれない、そうあれば異郷の里に想像が遊んだに違いない。やさしい目の象たちは吉宗公に喜ばれ浜御殿で飼われていたが、象の晩年は寂しかつた。最期を終えたと聞く。

孔雀献上

安南の役人の家は瓦葺きで、家具調度は螺鈿細工、そして孔雀の羽根が多用されていたと
いう。富裕の象徴ともいえる孔雀の羽根は、珍重された。徳川将軍に献上されて以来、腕の
達者な絵師がその雄の羽根を写とつた。筆を嘗めて尖らせ、骨描きし、それは、着物の意匠
となり、上肢を合わせると孔雀紋となり、円満富裕を象徴した。実際に見た人々は孔雀のぎ
らりとした胸の金属光沢にまぶしさを感じ、翼を全開にした姿に魅惑された。そうして南洋
への想いは止まなかつたはず、まるで病のように。

玉手箱の煙

角倉船は、五百人乗りであつた。布と網代の帆はたっぷりと風を孕み、海を渡つていつた。
縄に鉛の錘をつけて垂れ、四十尋より深いところには行かぬよう、慎重に陸に沿つて進んで
いったため、十七回のうち一度しか難破しなかつた。

そして、十六回で渡った人々の数はのべ八千人。この船に乗つて帰った人々の嘶は、人々を酔わせた、ひとりは、近江のひと西村太郎右衛門。二十歳で海を渡り、向こうに住まいし妻子を得て二十年後に故郷に戻ってきたときには鎖国で入国が許されなかつたという。それでも望郷の想いは遂げられることなく異国之地で果てることとなる。不憫に思つた故郷の兄弟は日牟禮ハ幡宮に絵馬「安南渡海船図」を奉納をし彼の魂を迎えた。

もうひとりは、播磨のひと天竺徳兵衛。角倉船で渡航、安南、シャムに渡りヤン・ヨーステンと共に天竺まで行きガンジス河の源流まで辿つたという。その見聞録「天竺文書」はあるえないことが知りたい世の人々の関心を集めた。のちに鶴屋南北が天竺徳兵衛韓嘶（いこくばなし）を書下ろし、いまでも歌舞伎の人気演目だ。乙姫様のくれた玉手箱の煙は消えない。

醉夢尽きず

安南へ

天竺へ

見知らぬ国へ

四百歳の吾

醉夢未だ尽きず

そうか、もう四百年も経つたのか。安南国には恩がある。難破船から放り出された乗組衆を助けて日本国へ送り届けてくれた。是非とも御礼を云いたい。この国も、京都も、こんなに栄えているのか。まだ子供たちは元気に遊んでおるか。若者は夢を追つておるか。商売は盛

んにやつておるか。安南はどうなつておる。船はあるか。吾は酔つて夢を見ていただけか。
善きものを交易し、互いに利する、この夢は、これからもずっと見果てることはない。

完

これは関連資料です。掲載不要。

▼・日本人とベトナム人の漂流

このような、貿易以外に暴風などにより漂着した例も多い。

記録に残っているベトナムからの漂着者は、元禄八年（一六九五年）に安南国王から長崎奉行に礼状と奇南香上品一品を送付越したことからもわかる通り、九人の漂着ベトナム人を救助し、中国人李才官の船に乗せてベトナムへ帰したことである。

また、天明七年（一七八七年）海上漂流中を西欧船に救助され長崎に運ばれたベトナム人四人がいた。何を聞いてもアナン（安南）と言うばかりで、中国人に聞かせたところ、ようやくベトナム人ということが判り、衣類や米四俵などを与えて、西欧船で帰国させたこともあつたらしい。

また文化一九年（一八二二年）ベトナム人五人が屋久島に漂着したことがあり、全く言葉がわからず苦労したらしいが、ベトナムへ行つたことのある中国人が通訳し、これらの者は安南国会安府の農民で、嘉定府から木材を運ぶ目的で船出し、暴風雨のため三月から漂流し、五ヶ月間釣つた魚を食べながら、やつとの思いで漂着したことがわかつた。

この五人も米十俵、布地五反などをもらい中国船で帰国している。

逆に、日本人がベトナムに漂着したのは、すでに述べた阿部仲麻呂の他、明和二年、常陸国多賀郡磯原村（現在の茨城県北茨城市磯原）の船頭友七ら六名が乗り込んだ姫宮丸が鹿島灘で暴風雨に遭い、四二日間漂流してベトナムに漂着し、会安に一年四か月滞在して帰国した。

その他には同年十一月、常陸の国磐城郡小名浜村、住吉丸沖船頭善四郎ら六名がベトナムに漂着し、上述の磯原村の船頭達とホイアンで会つたものと思われる。

更に、寛政六年（一七九四年）九月、奥州仙台の大乗丸船頭清蔵ほか一五名の船乗りが暴風により漂流、十一月にベトナムに漂着したが、翌年日本に帰着している。

△余談△

慶長7年（1602年）、交趾国から家康に象が贈られたのに続いて、享保13年（1728年）6月13日、中国人の船長・鄭大威が將軍吉宗に献上するために、2頭の象を交趾広南（ホイアンとみられる）の港から1ヶ月をかけて長崎に運んでいる。

この象についてベトナムからやつてきたのが、潭数、潭綿のベトナム人象使いであった。

一頭は病氣で死んだが、もう一頭は翌年3月13日、江戸に向かって旅立った。京都では中御門天皇に拝謁し、「広南從四位白象」の位を貢つてゐる。5月25日に江戸着。5月27日、吉宗が楽しみにしていた象を見る。その後、浜御殿で12年間飼われ、中野村（現中野区）の源助に「預け」となり、寛保2年（1742年）死去。（朝日ノビも百科 月刊はてなクラブ=1994年10月号）

^H Pで検索した資料▽

享保13年（1728）6月7日、徳川吉宗の時代。安南国（ベトナム）産のオスメス2頭が、唐船によつて長崎へ運ばれてきた。これを陸揚げするのに、大波止から海中へ長い仮橋を作り、唐船を横づけした。仮橋には土を置き、象の通り路だけ空けて土手のように土を盛り上げ、1頭宛てに象使いがつきそい慎重に上陸させた。こうして象はひとまず唐人屋敷の中に収容された。「象志」によれば、このうちの1頭は菓子を与え過ぎたために、象の舌の上に「できもの」ができ、象使いが八方手をつくしたが、この「できもの」は治らなかつた。そのとき、長崎の豪胆な町人が象の口に手をさし入れ、舌の「できもの」を洗つてやつた。象はいささか苦痛がやわらぎ、元気を取り戻したかに見えたが、結局はほどなく死亡した。あとに残つた2歳象は、江戸の将軍へ献上のため、享保14（1729）年3月16日長崎を出発した。「献上もの」とあつて、道中は取締りきびしく、街道の小石を取り除き、橋を架け換え、ムシロを敷いたり、犬猫を出さぬようふれ廻るやら、要所に水桶を置くやら、大変な騒ぎとなつた。生まれて初めて見る「象」の

道中に、沿道いたるところの見物人がひしめいた。1里と4里、5里と歩いて長崎出発以来44日目の4里26里京都に到着した。直ちに京都淨華院に収容され3日後、中御門上皇の御覽に入れた。上皇は喜び、「ふや
しあいはひとの国なるけたものもけふりのくに見ゆれしき」と詠われた。^翌29日、京都出発、5月25日江戸到着、浜御殿の象舎に入った。江戸の人氣は京都以上にたかまり、沿道黒山の群衆を驚かした。
27日、江戸城内に引き入れられ、將軍吉宗は諸大名と共に象見物。象は曲芸を演じて愛嬌を振りまき一同感嘆の声をあげたといつ。しかし、1頭の食糧が唐米8升、あんなん饅頭50、橙50、新わら200斤、籠の葉50斤、草1000斤といつので幕府ももてあまし、郊外中野村に象舎を作つて移したが……。

すみくらまり」（角倉マリ子）

京都府生まれ、日本詩人クラブ、関西詩人協会、現代京都詩話会所属、国際詩誌「詩の架橋」編集主幹。日本国際詩人協会代表、「心薫る女」2008年「夢紡ぐ女」2009年「光天橋」編集主幹。「心薫る女」2010年「愛装ふ女」2010年「地抱く男」2011年（以上竹林館）、「The織る女」2010年「愛装ふ女」2010年「地抱く男」2011年（以上竹林館）、「The Invisible Light」（共著）等、ストルーガ詩祭招待参加2010年、JAN SMREK国際文学祭招待参加2011年。コモ詩祭2015年、ミハイ・エミネスク詩祭2015年



※本書は著者による私家版であり一般に販売しておりません。